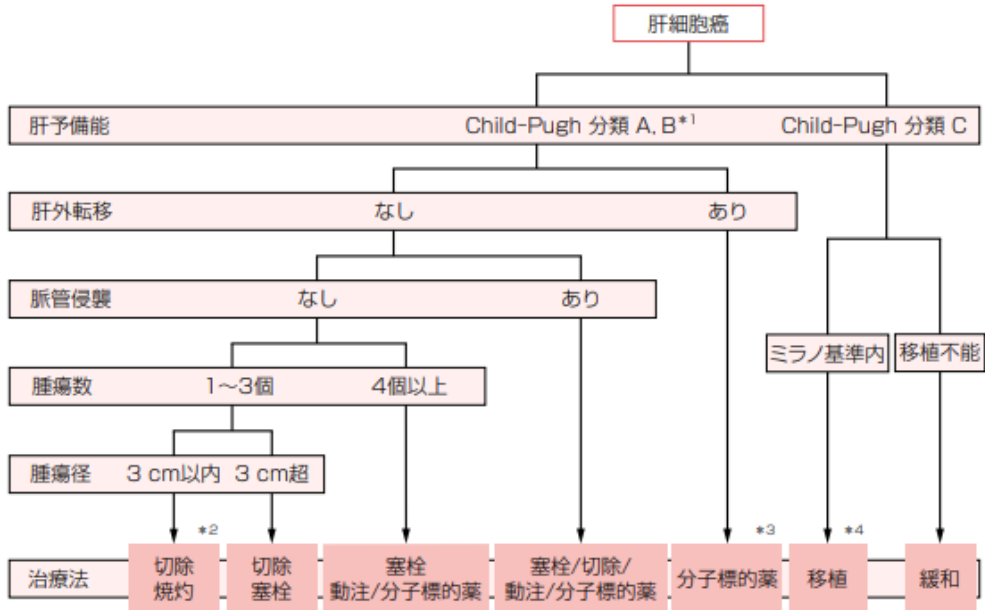


ラフェニブ（スチバ  
ーガ®）、レンバチ  
ニブ（レンビマ®）  
一、点滴薬が1種類  
ラムシルマブ（サイ  
ラムザ®）となっ  
ています。分子標的薬  
は、入院が不要で自  
宅にしながら治療が  
継続できます。今後  
は、免疫チェックポ  
イント阻害薬という  
免疫の働きを高めて  
がんを治療するお薬  
と、分子標的薬との

治療アルゴリズム



\*1: 肝切除の場合は肝障害度による評価を推奨  
\*2: 腫瘍数1個なら①切除、②焼灼  
\*3: Child-Pugh分類Aのみ  
\*4: 患者年齢は65歳以下 (出典: 日本肝臓学会編: 肝臓診療ガイドライン2017年版、P68)

併用により、効果が高く副作用の少ない薬物療法の承認が待たれているところです。薬物治療だけで肝がんが治ってしまう未来もそう遠くないかもしれません。しかしながら現在の肝がんは早期に発見されても再発リスクが高く、長期につきあっていく必要があります。治療により後遺症や副作用もさまざまあります。そこで万一、肝がんにかかっても、患者さんやご家族のみなさまの生活の質（Quality of Life: QOL）が保たれるよう、主治医や画像診断医、看護師、薬剤師、栄養士、医療ソーシャルワーカーなどの多くの職種が協力して、ケアや研究にあたらせていただいています。病棟や外来などでお気軽にこうした職種に療養のご相談などをお声がけいただければ幸いです。

著者紹介

庄村 雅子（しょうむら まさこ）



神奈川県出身  
1993年千葉大学看護学部卒業  
2007年東京医科歯科大学大学院博士課程修了（看護学博士）  
東海大学医学部看護学科教授  
2015年 AASLD Mid-Level Care Provider Award 受賞